



夏休みは長かった、 それとも短かったでしょうか？

7月の国語科の授業において「昼休みは長いほうがよいか、短いほうがよいか」というテーマで6年生が説得力のある意見文を書くことに取り組みました。「時計の時間と心の時間」という説明的文章を読んで筆者の主張と、それを支える事例をとらえる学習をした成果として自分の考えを発信する文集にまとめました。

長いほうがよいという人も短いほうがよいという人も、それぞれが自身の経験をもとに主張しています。その上で説得力を強化するために、読者の共感を得られるような経験を伝えることで補足説明を加えています。さらに長いとすれば、または短いとすればという仮説をもとに、それぞれのメリットやデメリットについて読者に再考を促す論理を展開している人もいました。そして、さらに次のレベルでは、読者を複数の立場に置いて考えさせる人もいました。つまり児童の立場に加え、先生方の立場も考えているのです。言うまでもなく学校での時間は決して自分だけのものではなく、学校生活を共にしている人どうしで共有しているものですから、特定の人だけの立場で考えるのではなく学校生活を営むすべての人にとって長いほうがよいのか、それとも短いほうがよいのかを考えてくれています。

また、時間の長さをどう感じるかによって、時間の使い方を再考している人もいました。長いと感じると無駄遣いしてしまい

そうです。短いと感じると一分一秒を集中し有効に活用しようと気持ちも出ます。

1日が24時間であることはだれにとっても同じです。昼休みが長いほうがよいのか短いほうがよいかは共有している人の間で意見が異なることが十分考えられます。

佐賀県のある中学校では昼寝の時間を取ることの是非を英語で議論し、ある期間実際に昼寝の時間を取ったところ、午後からの授業中の集中力が高まったという報告があります。

大津高校サッカー部の平岡和徳総監督(宇城市教育長)は『凡事徹底』や『年中夢求』という本を書いているらしいです。

大津高校ではチーム全体としての練習時間を長く取ることはせず、個人の主体性に重きをおいて、その練習時間を確保されています。個々の選手が自ら主体的に考えて必要なトレーニングや技能向上に取り組めるようにするねらいからです。

時間割のある学校生活と異なり、夏休みは長期的に自分で1日の24時間をデザインする必要があります。長期の休みに限らず一日一日をどう過ごすかという日々の習慣の積み重ねで、将来的に何を手に入れられるかが決まってくるそうです。イチロー選手や大谷選手らが日々の習慣を大切に継続することで、自信を持って勝負に臨める姿を見せてくれています。

夏休みを長く感じた人も、短く感じた人も学校生活を基盤とした基本的な生活習慣リズムを早く取り戻しましょう。